

初体験

# 私のガンとの遭遇

(下)

会員 平林 守

(訓子府町)

ガンセンターの精密検査結果を受けて、旭川厚生病院の外来の診察の関門を通り、検査入院は平成二十二年四月十三日から二十八日まで十六日間。消化器科、呼吸器科の各部長が主治医となり私のベットに担当医として表示されて連携検査は胃、肝臓、肺、脳、大腸のCT、MRIによる造影検査、内視鏡検査が繰り返し行われ精査した上で、ガン細胞をミリ単位で捕捉するペットCTによる先端医療(放射性同位元素「弗素18」とブドウ糖混合液を使用、二時間ぐらいでガン細胞に集まるブドウ糖の集中度をペットCTが映像でとらえる)です。

検査入院五日目の十八日に、私の膝から上にガンのあるのは左肺だけと判明、嬉しい結果がペット検査による

精査で診断され、安堵の思いに思わず「先生今なんといいましたか？」と聞き直しました。四月二十八日呼吸器外科のF部長先生に手術のための最終診断を受け、五月二十四日再入院、二十五日手術を予約して、一旦、退院して帰町、自覚症状全くなし、ゆっくり散歩を心がけ、スーフルで肺の機能強化を一日五回位行って手術に備えた。

五月二十四日手術のため再入院、午後麻酔科の先生に面接「高齢(七十九、五歳)高血圧、微小脳梗塞と悪い条件が三つ揃っているが充分注意して対応するので、安心して手術を受けてください」と話があり、午後は呼吸器科部長F先生からCT写真を前にして、「左肺上葉にあるガン

は1、4cm大で開けてみないと良性か悪性か判らない。区域切除か部分切除かは判断をまかせて貰うとして、同意書にサインしてください、肺活量は標準以上でスーフル効果もあり合併症の心配はないでしょう。

「先生なるべく痛くないように切ってください」というと「それなら大丈夫です、あなたが麻酔から覚めるころは手術が終わっているので痛みは全く判らないことになっていきます」と笑い話で安心感を与えてもらう。

二十五日は朝から下剤などで準備して、一時三十分看護師に誘導されて手術室へ、入口まで心配そうに妻規子、長女香織、二女香奈、孫拓海が付き添う形できたので笑顔で全員とハイタッチ。スタッフ八人位に一列に並

んで笑顔で迎えられ私も笑顔で自己紹介の挨拶をして手術台に自分で登る。早くからハラキメをしていたのでマナイタの鯉? 自分でも不思議に落ち着いた心境だった。

「体を曲げて、はい、エビのように曲げて麻酔を少しずついれま

す。どうですか、大丈夫ですか」までは記憶があるがここで意識を完全に失う。その間四時間、気がつくとう上から顔が覗き込み、妻に悪性だったのかと問いかけたと言われたが、

睡魔に襲われなんと言ったかほとんど記憶にないが受け答えははっきりしていたとか、長女が「さすが五千円の山に登っただけのことはある」と言った言葉だけはつきり記憶に残っていた。

その後麻酔が覚めてくるに従い、自分の体は鼻に酸素のパイプ、尿管と他に管が五本位車つきのポールにつながれてICUのベッドに横になつていた。執刀されたA医師が顔をみせ「どうですか」と声をかけてくれたので「左肺が重苦しい感じはあるが痛みはほとんどなく、名医の技術を感じます」「リンパはキレイなので部分切除、ガンそのものは8mmで回復は早いでしょう」とやりとりがあり、ベッドごと上体を起こしレントゲン写真を撮る。

午後十時頃、静かに上体を起こし、看護師の案内で自分でポールを押して病室に歩いて戻り、孫と回廊を三回回り、順調な所を見せて動き過ぎを看護師に注意された。妻は手術後は指定のコーポに泊り込みだった。四日目につながれたパイプが外れ、退院は自分で決めて良いと言われる程順調に経過、手術十日目の六月三日退院。

抗ガン剤は使わず、X線と血液検査を月一度旭川厚生病院ですることになり、二、三年間は定期的な監察が必要で通院して、再発・転移を手エックします。更に一年経過するごとにペット検査を行うい万全の対策を行う予定。

私の分野では、極力運動を行い、手術前に行っていた事にはすべて挑戦して、できるだけ早く普通の生活にもどるように少しずつ運動のグレードを上げることが、手術後の回復を早めるので努力して下さい。退院に当たって特に注意されたことを実践する日々を過ごし、目下順調に快方に向かっている。私の経験から新しい日赤病院には、オホーツク三次医療圏の中核病院として、地域住民の健康を守るために、ペットCT装置の導入と、呼吸器科の専門医の充実を早急に実現して、地域完結型の医療体系を確立する事を訴えていきたいと思っている。

## 編集後記

私たちが応援する北見赤十字病院からも、石巻赤十字病院での看護支援、釜石での救護班など現地に赴き、市民の方々と向き合って治療に当たられました。その様子を今号では特集いたします。

このように日本中の赤十字病院がこの未曾有の東日本大震災の現場で懸命な支援活動をしていることに感謝し、私たちもささやかではありますが赤十字病院への支援活動を続けてまいります。(阿久津記)

